

機関番号：12102
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2008～2010
 課題番号：20520370
 研究課題名（和文） 中国語における補語構造の非対称性に関する歴史的研究
 研究課題名（英文） Historical research on asymmetry of Chinese complement structures
 研究代表者
 伊原 大策（IHARA DAISAKU）
 筑波大学・大学院人文社会科学部研究科・教授
 研究者番号：30184790

研究成果の概要（和文）：

本研究では、現代漢語の補語構造に見られるいくつかの非対称性のうち、「来得及／来不及」←≠→「来及」に見られる非対称性を主要な対象として取り上げ、歴史語法研究の観点から考察を加えることにより、その非対称性が発生した背景と由来を明らかにした。すなわち、その原型の「V 得及／V 不及」には複数の起源が存在し、上古漢語において時間を示す「不及 V」が中古漢語において空間を示す「VO 不及」と相互に干渉を起こした結果、「VO 不及」が時間を示す機能を獲得するに至り、それが明代以降の補語構造における賓語位置の変化に伴い、現代漢語の「来不及」が成立したことを見いだした。

研究成果の概要（英文）：

The present research focused mainly on “来得及/来不及” versus “来及” among asymmetrical complement structures in modern Chinese, demonstrating its historical background and origin with historical usage perspective. The finding was that the prototype “V 得及/V 不及” had multiple origins, and “不及 V” indicating time in Archaic Chinese interfered with “VO 不及” indicating space in traditional Chinese; as a result, “VO 不及” acquired the function of showing time, and developed into the present Chinese “来不及” through the change of object positions after the Ming period.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：結果補語、可能補語、非対称性

1. 研究開始当初の背景

中国語の補語構造について歴史的観点か

ら見た場合、いくつかの非対称性が存在する。例えば、肯定形「V 得」とその否定形「V 不

得」との間に認められる形態上のアンバランス、また可能補語構造が賓語を伴った際の「V得OC」とその否定形「VO不C」との間に見られる賓語の位置の不均衡、さらに「来得及」が常用されるにもかかわらず、「来及」が存在しないという点に認められる結果補語と可能補語との間の変換の際の非整合性などである。

こうした非対称性のうち、とりわけ構造上においても著しい非対称性を示すものとして「来得及／来不及」 $\leftarrow \neq \rightarrow$ 「来及」や「吃得消／吃不消」 $\leftarrow \neq \rightarrow$ 「吃消」がよく知られているが、従来はその形態の存在のみが注目されるばかりであり、その非対称性の由来について考察されたことはほとんどない。

また、こうした非対称性を持つ補語構造に必ずしも形態上の顕著な特性があるわけではないため、中国語初修者が学習過程で作文を行う際に、対称性を持つ補語構造と非対称性を持つ補語構造とを混同する結果、書き誤ってしまうという事態も生じがちである。

そのため、こうした非対称性が如何なる背景で発生したかについて、いまだに不明の点の多い結果補語構造や可能補語構造の成立過程を明らかにするとともに、中国語教育の観点からも、結果補語と可能補語との間の変換条件を簡潔に示すことで、初級学習者の素朴な疑問にも解答を与えることが求められている。

補語構造の非対称性を明らかにするためには、補語構造誕生時の語法上の変遷過程が関係していることが想定されるため、歴史的な観点からのアプローチが効果的であると考えられる。

歴史語法研究の立場からの補語研究においては、太田辰夫 1958(『中国語歴史文法』江南書院)が早くもその現象に気づいており、「得」を伴う補語構造の由来が単一でないことを示唆している。以後、日中の少なからぬ研究者が補語構造の成立過程の解明に向けて多くのアプローチを試みてきた。しかし、それらの研究は時として先行研究が見出した歴史的資料を再利用しつつ、わずかな新しい見解を付け加えようとするにとどまるものであり、一部の優れた論文を除いては、目だった成果が見られなかった。ところが、最近の約十年の間、この方面の研究に新しい動きが生じ、これまで用いられなかった資料を広範囲に使用しつつ、新しい視点からの研究が発表されるようになった。これは、最近になって発達した電子コーパスが多くの研究者に利用可能になったことに加え、他分野での研究成果を応用しようとする視点、例えば、補語構造が成立する過程において文法化がどのように行われたかを探ろうとする視点、自覚的に持ち込まれたことによる。

そこで本研究は、これまでの補語研究の成

果を踏まえ、どのような条件のもとでどのような文法化が生じた結果、非対称的な構造が見かけ上の均衡を獲得できたかを明らかにすることが、補語構造の非対称性を効果的に解明する一方法であると認識し、研究を進めるに至った。

2. 研究の目的

本研究は、補語構造の非対称性の由来を歴史的に遡る歴史語法的研究手法を採用することにより、補語構造成立過程に関する従来の研究に再検討を加え、何時の時代にどのような過程で如何なる力が機能した結果、どのような文法化が生じたかを明らかにしようとする。すなわち、補語構造成立の際の変遷過程において、非対称的な構造がどのように見かけ上の均衡を獲得し、現代中国語の中で安定した姿を実現するようになったかを明らかにすることにより、「来得及／来不及」 $\leftarrow \neq \rightarrow$ 「来及」や「吃得消／吃不消」 $\leftarrow \neq \rightarrow$ 「吃消」等に見られる、結果補語形と可能補語形との間の形態上の非対称性の由来を解明しようとする。また、こうした変遷過程における補語とその周辺の語法現象が如何なる条件のもとで相互に影響し合い、それが新語法誕生にどのように機能したかについて、歴史語法研究の観点に基づき上古漢語にまで遡り、補語構造発生メカニズムを明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

歴史語法研究においては信頼できるテキストの獲得と、それを迅速正確に処理して目ざすデータを得ることの可能な環境を作ることが先ず求められる。その上でそれらを整理し、分析することで仮説を立て、試行錯誤を繰り返すことにより、補語構造の成立過程を解明しつつ、非対称性の由来を探る。

これまでの補語構造の史的研究では、上古漢語資料は史書に偏り、近世漢語資料は白話小説に偏る傾向があった。しかし本研究では、従来のそうした枠から出て、対象とする資料の範囲を拡大し、札記や類書にも目を向ける。これらの資料には、文言性の文体の中に当時の補語構造の萌芽的形態が反映されることがあるからである。幸い、最近には善本の影印本が出版され、また、大規模な電子コーパスも商品化されてきた。そこで、それらを積極的に利用する一方で、商業化のベースに乗らない資料については、自らデータベース化することにより、不足を補う。例えば、近世漢語前期の姿を一部で映している『西遊記』朱鼎臣本や『西遊記』楊致和本、また『三国志演義』の数種の異本などをその対象とし、さらに句読や本文異同に検討と評価を加え、それをデータベースに取り込む。

こうして得られたデータをもとに、「V得」

とその否定形「V 不得」、及び「V 得 0C」とその否定形「VO 不 C」の非対称性の由来に考察を加えるが、その際、補語構造の成立過程全般に機能して変遷を促す力に注目するだけでなく、一部の動詞と賓語が変遷過程において「得」や「不」などを通じてどのようにCと結びつきつつ、その補語としての内部構造を実現したかという点にも目を向ける。

とりわけ「V 得及/V 不及」の場合、補語の非対称性について、その発生段階において、「得」と「不」が動詞を媒介としてそれぞれ個別に補語相当成分と結合を強めた結果として生じたものであると推測できるので、時間表現に関わる「及」が「得」や「不」と如何なる構造を持ちつつ動詞と結合していったかという視点を保持しながら検討を進める。その過程においては、上古漢語の時間表現のパターンを整理し直し、その結果を中古漢語の補語構造の進化過程の考察に持ち込み、有効な分析方法を得ることを目指す。

また、「V 得消/V 不消」については、この句型の普及の初期において地域的な偏りが存在するので、方言性の観点から分析を進めることが有効であると想定できる。

4. 研究成果

現代漢語の補語構造における機能上の非対称性のうち、最も目立つものの一つは結果補語構造と可能補語構造との間に認められる交代可能性の偏りである。例えば、多くの結果補語構造が可能補語構造との間で相互変換性を持つ(例：喫完 \leftrightarrow 喫得完/喫不完)にもかかわらず、一部の例はそうした対称性を持ち得ない。すなわち、“拿得動/拿不動”にはそれに相当する結果補語形“拿動”が現代漢語に存在しない。同様に、“来得及/来不及”には“来及”が存在しない。さらに“吃得消/吃不消”には“吃消”が使われない。

これらのうち、“拿動”については、歴史的観点から見た場合、それがかつて類義結合の連用構造型として使用された事実が確認できる。そのため、“拿動”が現在用いられないのは、連用構造型が補語構造型へと変質した結果、それが補語構造としての生産性を十分に獲得できなかった背景が存在するからであると考えられる。

一方、“来得及/来不及”に関しては、かつて“来及”が使用された痕跡を見いだすことができないだけでなく、強いて“来及”の存在を想定しても、これが「間にある」という意味を持ち得るに至る派生・拡張の経路を推定し難い。そのため、この語が非対称性を持つに至った背景には相当に複雑な要素が隠されていると見なければならぬ。

本研究では、「来得及/来不及」 $\leftarrow \neq \rightarrow$ 「来

及」に見られる非対称性が如何に発生したかについて上古漢語から現代漢語に至るまでの歴史的観点から考察を加えることによって、“V 得及/V 不及”には複数の起源が存在することを明らかにした。すなわち、上古漢語において時間を示す“不及V”が中古漢語において空間を示す“VO 不及”と相互に干渉を起し、その結果、“VO 不及”が時間を示す機能を獲得するに至り、それが明代以降の補語構造における賓語の位置の変化に伴い、現代漢語の“来不及”が成立したと考えられる。

またこの過程においては、“V 得及/V 不及”型可能補語が“V 得到/V 不到”型可能補語との間で競合を生じた過程をも観察することができる。すなわち、“V 得及/V 不及”は“V 及”を原型に持つだけに「空間型」と「時間型」の両方の機能をあわせ持っているが、一方、“V 得到/V 不到”について見ると中古漢語期に「空間型」は存在しない。

ところが近世漢語期に入るとしだいに「空間型」が発生し、やがて圧倒的な優勢を示すに至る。これを数値で示せば、《搜神記》(二十回本)では「空間型」の“V 得及/V 不及”が4例であるのに対し、「空間型」の“V 得到/V 不到”は0例である。時代がやや進み、《董解元西廂記》では前者が2例で後者も2例となって両者が拮抗し、やがて《平妖伝》(四十回本)では前者の6例に対して後者が12例となる。ここに、「空間型」機能を備える“V 得及/V 不及”が、類似機能を有する“V 得到/V 不到”に駆逐される過程を鮮明に認めることができる。この事実から、「時間型」に特化した“V 得及/V 不及”は、本来「空間型」と「時間型」の機能を兼ね備えていた“V 得及/V 不及”が「空間型」機能を喪失した結果、生じたものであると言える。

現代漢語の「来及」は機能について見れば言うまでもなく「時間型」であり、この「時間型」の特性は以上の変遷過程に由来する。したがって、現代漢語で“来及”が用いられないのは、“来得及/来不及”が実は形態上“V 及”を原型に装った擬似的な可能補語を起源に持ったためであると言える。

そこで、“来得及/来不及”の非対称性の由来についてまとめると、次のように言うことができる。上古漢語期において等立的連用構造のみを有した“V 及”は、「空間型」機能しか持たないまま、中古漢語期になって結果補語構造を構成するに至った。またこれと時代的に併行して、動詞連語としての“VO + 不及”もやがて空間型の結果補語構造“VO 不及”を構成した。ところが一方で、上古漢

語には「時間型」機能を備える“不及V”が已に存在し、「空間型」機能を有する“VO+不及”とは機能や用法を異にして使用されていた。ところが中古漢語期になると、両者は形態の一部分に共通の要素を持つため用法上において干渉を起こして両者が合流し、その結果、「時間型」の“VO不及”が生み出された。“来得及／来不及”はとりもなおさずこの“VO不及”の近世語における形態であるため、“来得及／来不及”の原型を強いて求めようとすれば、その形態から類推できる“来得及”ではなく、上古漢語の“不及V”であるということになる。したがって、「来得及／来不及」←≠→「来得及」の関係に認められる非対称性の由来は、他でもなく以上の変遷過程にあると言える。

ところで、「V得消／V不消」に対する「V消」が存在しない点については、「V得消／V不消」型の例として使用される「吃得消／吃不消」の初期例が『海上花列伝』や『九尾亀』等の特定の地域を背景に成立した作品に偏って認められることから、これらの作品の方言性と結びつけて、その由来を考えることができる。すなわち、こうした南方方言系の作品が起源となり、民国初期の新文学運動の中で南方方言を基礎に持つ作家達によって受容され、可能補語形のみが現在の共通語の中に取り入れられたものと考えられる。この語に関する可能補語と結果補語との間の非対称性には、現代漢語が新文体を完成させる過程における偏った方言の受容という背景が存在する。

さらに「対得起／対不起」とその原型として想定されるべき「対起」との関係については、清末から民国初期にかけて「你好」等の新しい挨拶言葉の成立時期と前後して、「対得起／対不起」が現れ始めることから、「対起」が本来持っている意義が社交儀礼で要求される場において用法を些か変形させつつ可能補語形を備えるに至ったものと考えられる。したがってここでは、封建社会が市民社会に向かって変質を始めた社会的要因が、新たな語形の誕生を促したものと推測できる。またこの過程においては、間接的な形で西洋語の翻訳の影響をも想定できる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

①伊原大策 “来不及”型可能補語句型の成立過程、『地域研究』29号、113～127頁、2008 [査読なし]

②伊原大策 “来不及”句型と“不及来”句型、『中国文化』66、14～26頁、2008 [査読あり]

[学会発表] (計1件)

①伊原大策 旧漢語「旅行」の新漢語への再生について、『文化における歴史—伝承・断絶・再生(輔仁大学日本語文学科国際シンポジウム)』2009年11月21日、台北[査読なし]

6. 研究組織

(1)研究代表者

伊原 大策 (IHARA DAISAKU)

筑波大学・大学院人文社会科学研究所・教授

研究者番号：30184790